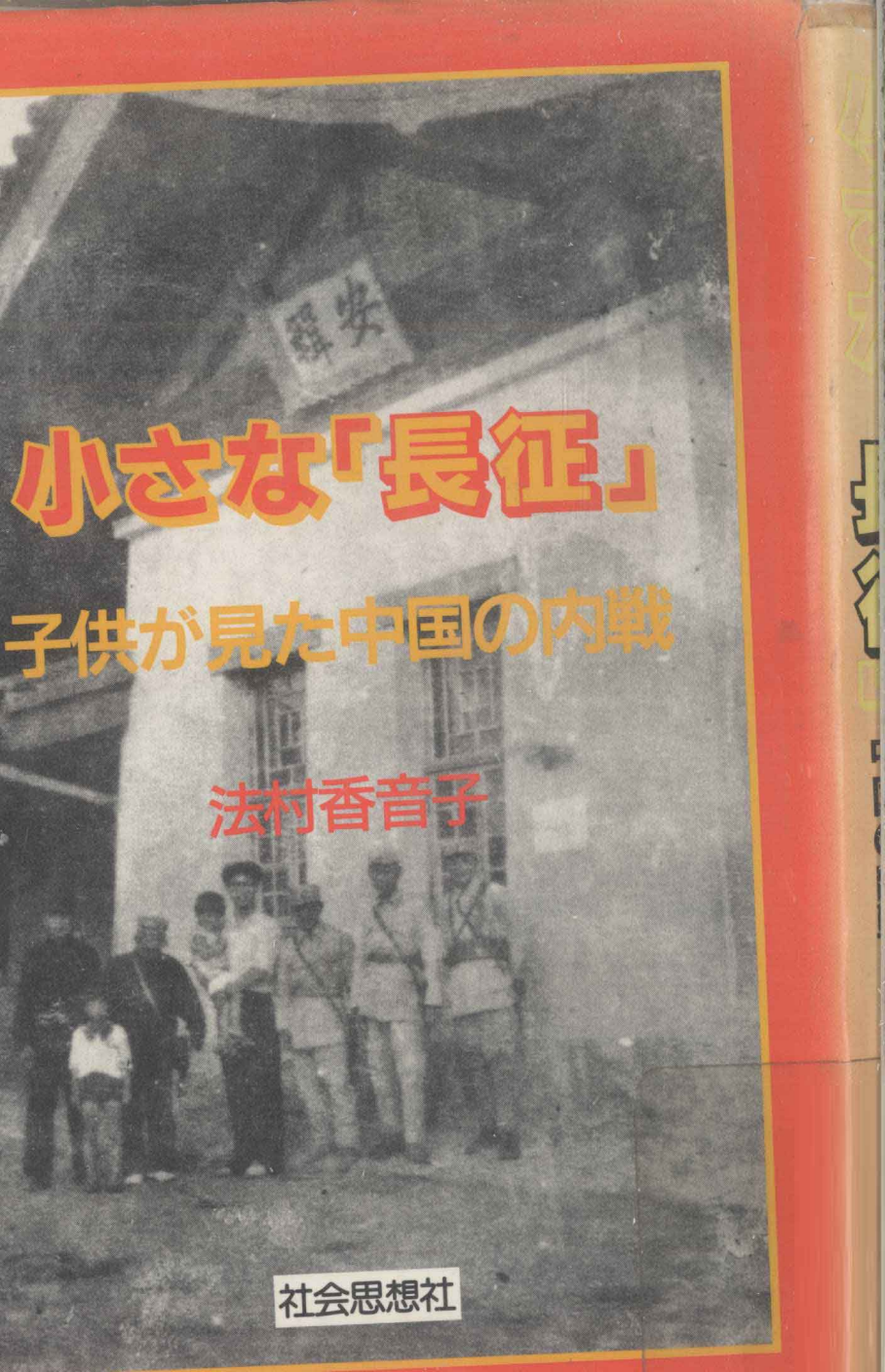




小さな「長征」

子供が見た中国の内戦

法村香音子

社会思想社

小さな「長征」

子供が見た中国の内戦

法村香音子

社会思想社

著者紹介

法村香音子（のりむら かねこ）

1935年10月15日、旧満州新京特別市日本橋通に生まれる。旧安東市兜在満国民学校4年のときに終戦。1951年3月、遼寧省海城縣海城二中に入学、その後遼寧省立衛生技術幹部学校（蓋平）、通化医士学校、中国人民大学（北京）を終了。1958年7月、帰国。1964年11月より、東京大学原子核研究所高エネルギー物理学研究部に勤務、現在に至る。

© Norimura, Kaneko 1989

小さな「長征」

Printed in Japan

1989年9月30日 初版第1刷発行



著者 法村香音子

発行者 宮川安生

発行所 株式会社 社会思想社

東京都文京区本郷3-25-13

電話 813-8101

振替 東京6-71812 郵便番号 113

印刷 三松堂印刷株式会社

製本 合資会社黒田製本所

本書の定価はカバーに明記してあります。

落丁・乱丁本は小社にお送り下さればお取替えいたします。 ISBN4-390-60325-6

目次

プロローグ 9

放浪の旅へ

私の「終戦」 13

拉致された私たち 17

八路軍に軟禁される 22

戦火に追われて 26

馬車をねぐらに 30

馬車が転覆する 31

優しい大地

中国人の生活 36

お米のご飯は張さんの思い出 42

炕のぬくもり、家のぬくもり 51

私たちは小八路 55

別れと出会い 59

父の仕事

天然痘 72

初めて接触した中国人 77

菌の保存に苦勞する 85

鴨緑江を越えて

父の怒り 90

「ありなれ」の岸辺 96

袋の底の村 100

飢えが迫る 107

愛犬クリ

湖を渡るクリ 109

魚を獲り、蛙を食べる 119

クリは土煙の彼方へ 124

逃亡計画

赤犬 129

父、逃亡を図る 131

夜明けよ、早くこい 139

再び、中国へ

貨車の旅 145

太陽は鴨緑江を照らす 149

中国のにおい 155

私の家は輯安駅 158

残留日本人

医療に従事する人たち 161

「オレ、ニホンゴシッテル！」 166

鬼子 169

衛平と小侯 174

束の間の安らぎ

いそがしい大夫 178

命たくましく 184

「家出」 190

「赤い」カササギ 203

死と生と

土地改革の足音 207

コウノトリは夜に来る

212

八路軍の女兵士 219

悲しみのあとに

輯安を去る日 224

鴨緑江を下る 230

安東に立つ 237

俊坊の死 245

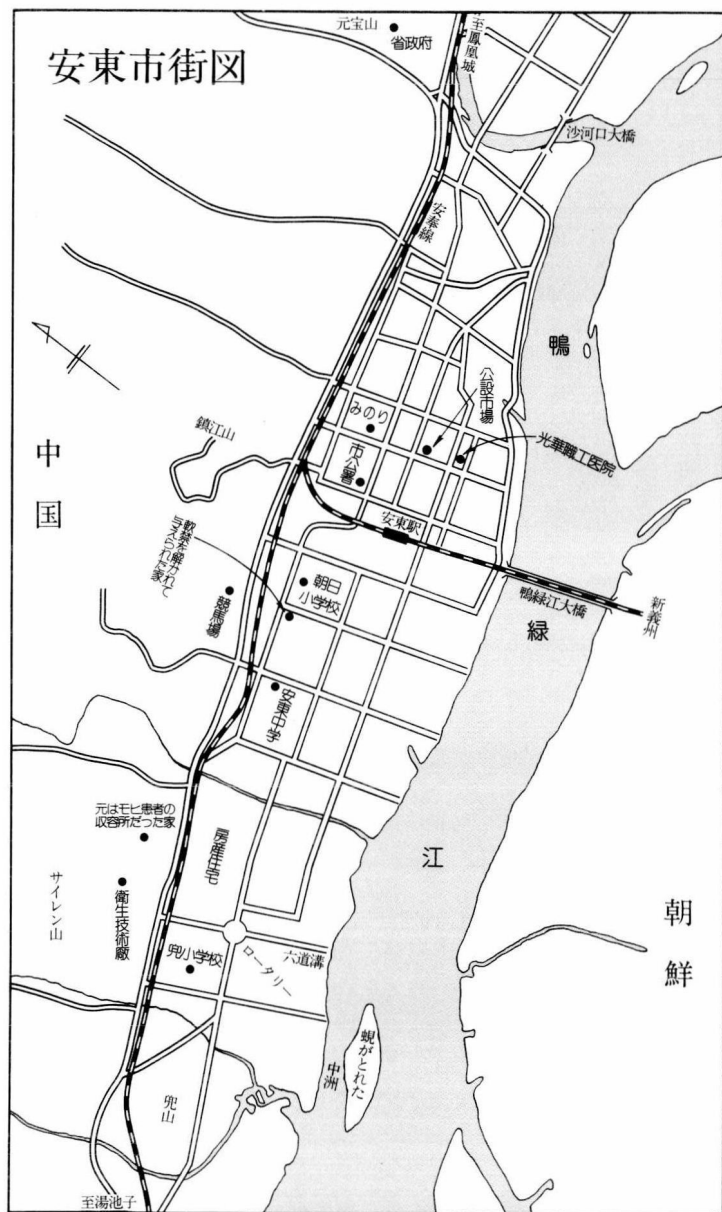
中華人民共和国 255

エピソード 263

小さな「長征」

●子供が見た中国の内戦

安東市街図



ブローグ

〈風邪でもひいたのかしら……〉

梅雨^{つゆ}を知らない大陸育ちの私は、身体がだるくてたまらず、さっぱりとした白い開襟シャツに着替え、いそいそしている人びとを横目に、赤ん坊に添い寝をしながらうとうととしていた。

「おい、ママも早く上がっておいでよ！ 島が見えてきたよ、いよいよ日本に着いたんだよ！」
目を開けると、広い棧敷のそちこちに荷物だけを残して乗船客が甲板へ消えた通路を、上気した面持ちの夫が小走りに来る。

「ババさきに行つて、すぐ行くから」

初めて掛けたパーマをネッカチーフに包み、機嫌良く目をさました赤ん坊を抱いて、私ひとりが取り残されたような寂しい気持ちで、甲板への階段をゆっくり上がっていった。

一九五八年（昭和三十三年）七月十三日の昼さがり、第三十三次引き揚げ船「白山丸」は、二百余の日本人を乗せて舞鶴に入港した。

中国からの集団引き揚げは、それをもって打ち切りとなるという、最後の船であった。

男も女も近づいてくる故国の山河に涙を流しながら手を振り、白髪も混じる髪を潮風になぶらせ

て、さあ、これからだ、と互いに手を取り合ったり、肩をたたき合ったりしていた。

すでに戦後も十三年を経ていたから我を忘れたような熱狂はなかったが、それだけに甲板には新生日本を、目前に、強い決意を秘めた情熱がみなぎっていた。

多くは看護婦さんやお医者さんなど医療技術者であったが、なかには満蒙開拓少年義勇軍として満州に渡り、戦後、八路軍に抑留され、年配者になって帰って来た人も少なくなかった。

北京にいたときに知り合って結婚した私の夫も、かつてはそんな少年のひとりであった。

ピンクの縞の中国服を着た私は、二十二歳になっていた。そして、生後六か月の長女を抱いて人々の肩越しに、黙って濃い緑の山の連なりを眺め、陰気な暑さにげんがりしていた。

迫ってくる日本は、僅かな灌木が這う、あの中国東北地方の禿げた岩山の黄土色とも、三日前に出港した天津の赤茶けた色ともぜんぜん違う、私には「心が和む豊かな緑」とは言いきれない、無表情な「ただ青」という印象の、馴染みのない異国であった。

緑の山の麓にマッチ箱があちち向きこち向きに置いてあるような家にしても、風が吹いたらバラバラになってしまいうちに心細げで、冬は寒そうだった。

中国の家は土に埋まり、土間には火が踊っていたのだが――。

海の向こうに置いてきた楽しかった日々を惜しんでも、大地に抱かれていた安心感をいまさら恋うても、もはやせんないことであった。

中国で生まれ育った私は、まったく日本を知らなかった。上陸してからどこに行くのかも分から

なかった。天津まで見送りにきた父が書いて持たせてくれた、そこが私の本籍だという「福岡」がどこにあるのかも知らなかった。

へもしも夫とはぐれたら……。もしもところ書きをなくしたら……。>

怖いもの知らずの私が初めて知った怯え^{おび}であった。中国での、「なんとかなるさ」という、あのびのびした気持ちは、そこが慣れ親しんだ国だったからか、それとも、父や母や妹たちがいるという安心感に裏打ちされたものだったのか。

希望と不安の入り雑^{*}じった気持ちで、これからの生活を思案しても、皆目見当がつかず、下船連絡を待つあいだ船底の棧敷に座って、娘を胸に抱きしめ、父や母や五人の妹たちと別れて夫について帰ってきたことを私は深く後悔し始めていた。

だが、まさに初めの一步、棧橋をつたって舞鶴のコンクリートの岸壁に降り立った時、私の娘に両手をさしのべてきた真っ白な髪をした小さな年寄りの目の中に、私は中国で馴染んでいた温かい色を見たのであった。義父であった。日本での第一歩で、私はその色を見ることができたのだ。

そして、私の帰国から遅れること三年、双子が生まれて身動きがとれずにいた時に、肉親たちを日本に迎えることができたのである。

今回世に送りだされることになった幸運なこの本は、中国共産党の指導のもとに、中国人民が八年にわたる抗日戦争の勝利を戦いとしたのもつかのま、日を置かずして再び始まった深刻な内戦、

つまり中国共産党の八路軍と、アメリカの援助を受けた蒋介石国民党の軍隊との、東北地区での戦闘状況の推移を背景に、八路軍に留用され、遊撃戦の旅に出た医療技術者一家の二年間の出来事を、子供であった私の思い出としてつづったものである。

時代は主に、一九四六年七月から翌年六月までの、人民解放戦争における八路軍側の防御の段階、防御から攻撃に転じ東北解放を勝ちとる寸前の一九四八年三月、そして一九四九年十月一日の中華人民共和国の誕生の日までにとどめた。

中国人はもちろん、シベリア抑留の人びとの陰になってはいるが、私たち一家ばかりでなく多くの日本人が、中国に抑留されて人民解放戦争に参加し、大切な青春を捧げたのはまぎれもない事実である。

その中国は、今年（一九八九年）十月一日、中華人民共和国として建国四十周年を迎える。

放浪の旅へ

私の「終戦」

私はその時、八つ手の葉陰でコンクリートの三和土^{たき}にしゃがみこんで、トウモロコシの皮むきに熱中していた。

母は出て行った時と同じようにそそくさと戻って来ると、険しい顔つきで、

「あんたたち、ちょっと来てちょうだい。急いでうちにお入り」と、言った。

へなんだろう……」

ズックを脱いで、上がり框^{かまち}の雑巾^{ぞうきん}に足をこすりつけながら、私は、六畳間の真ん中に座っている母の様子を窺^{うかが}っていた。

「なにしてんの！ 早くいらっしゃい。はやく、ここに座って」

母がとがる理由が解せないまま、私は慌てて妹と母の前に行き、かしこまって正座した。

「あんたも」と、生子^{せいこ}ちゃんも細い肩を押さえられ、よろよろとのんちゃんの横に座らせられたの

で、よく怒られる私は自分のことじゃないらしい、と思って少し安心した。

母は普段から姿勢が良いが、もう一度割烹着かつぼうぎの裾を正してちゃんと座り直し、

「あんたたち、よく聞いてちょうだいよ」

と言うと顔を伏せ、ちょっとした間黙り込んだが、意を決したように顔をあげた。

「大変なことになったのよ。父ちゃんは、もううちには戻っていらっしやれなくなったの」

もともと色の白い母の顔が、紙のようにこわばっている。

「あのね、日本は戦争に負けたの。だから、今日明日にも安東に敵が上陸して来るといふ話なの。

私たちは大変なことになりそうなのよ」

そう言い終わるとややして、膝の上に置いた手ぬぐいから柳包丁を取り出し、私たちの前に置い

た。

「アメリカの兵隊が安東に上陸して来たら、母ちゃんはこれで……」

と、左手は割烹着の膝に置き、右手で柳包丁の柄を取り上げて水平に持つと、

「これであんたたち三人を殺して、敵の一人や二人を殺して、母ちゃんも死ぬつもりです。覚悟し

てちょうだいね。母ちゃんは、あんなに優しくかった父ちゃんや、あんたたちみたいに良い子を持て

て、ほんとうに幸せでした。……ありがとう」

母は隣組で終戦を知らされると同時に、アメリカ軍が大東港方面から安東に上陸して来る、とい

うデマも一緒に仕入れてきたのであった。